

存在は涙を流す

孔枝泳

(辻本武 訳)

私は解雇された。一ヶ月前に既にその通知をもらい、デスクは先週に整理した。すべてが予告された通りであった。それは深まりゆく秋を目の前にして、深刻に落ち込んだ景気のせいだった。会社はブランド・ネームをちよつと外国語風に変えて、それにふさわしいイメージの服を生産する準備をしていた。短髪に金属色のヘアピンを挿した新世代の若者が短いスカートと長ブーツを履いて大勢で会社の門に入って来る一方で、パーマをしょっちゅうかけてもぱさぱさになる髪の毛をしている我々が反対側の門から出て行かねばならない状況だった。ひらめくアイデアと新鮮な感覚を生命とするこの職場では実際のところ三十歳になればもう旧世代であつて、我々は嘱託デザイナーという職名を付けられていたから正確に言えば解雇ではなく、嘱託契約解消だった。経理課に行つて、ここ一ヶ月足らずの日付が書かれた立替金明細書を出した。商業高校を出たばかりのように見えるロングヘアの女の子が私に支払う紙幣を封筒に入れて、小銭を数えていた。私は大学を卒業してすぐに入社したので、十年にちよつと足りない日々をこの会社で過ごしたわけであり、そのように過ぎ去った日々がその女の子の数える小銭のチャリンという音で終わろうとしていた。十年、その間に秋を知らせるバーバリーがウールのキャバジンからシルクに、シル

クから金属光沢の出る布に変わっていった、私が最初にデザインした服に付いていた「シンド」という名前は今では「ク ティベ」という異国の言葉に変わっていた。私は小銭を数えている女の子を淡々とした表情で見た。淡々とした自分の表情を、鏡も見っていない私が意識したのは、その時に私の胸に痛みが走ったためであった。ひよっとして私がこの女の子に嫉妬しているのかも知れないという考えがよぎったのだ。それは今までパーマ液を一度も浸けなくてもみずみずしい女の子の髪の毛ではなく、単純労働をしているこの女の子の仕事のせいであった。私が初めて入社した時の胸のときめき、自分の力で稼ぐという仕事の満足感、ファッションデザイナーという名前が与える若干の誇りといったものが今はほとんど記憶にもない。しかしこの女の子ぐらいだった年の時、私は熱い思いを語っていた。「創意的な職業に就きたい。」ところが最後の月給袋を待っている今の私は抜け殻でしかない。私の中で自分を自分らしくしてくれていた潤いのようなものが全て、創意力という名前でも使い尽くしてしまった、そのような感じだった。いくら海外出張をして世界の有数のファッション雑誌にどれほど目を凝らしていても、流行は私のはるか前を駆けて行っていた。常に自分よりも速く走ると設定されているボールを追いかけていく人のように、私はいつも息切れしているのだった。しかしそれでも私はそれなりに最善を尽くして走った。ところがある日、誰かが私に近づいてきて言った。「走るのほそれくらいにしなさい。ボールはすでに空に上がってしまったんですよ。今は翼を着けた人が必要なんです。」私はその場で、そのまま呆然となった。女の子が小銭まで正確に数えた封筒を差し出した。生計の道を絶たれてこの世に一人残されたような虚脱感が私の中をかすめていった。離婚しても、このように一人ぼっちだ

という考えはしない私だった。私は解雇という名で駆け寄ってきたこの所属感不在の状態を感じながら封筒を受け取り、上の空でお金を数えた。女の子がふと私を見た。私は今顔見知りになった彼女が「たまには来られるのでしょうか」とか「これから何をなさるのですか」と聞いてきたら、どのように答えようかという下らない考えをちよつとしてみた。しかし彼女はプリンターから出てきた領収証をビリッと引きちぎって私に差し出すと、すぐに次の順番を待つて立っている人の支払い明細を入力し始めた。言葉をかけたのは私の方だった、「たまには来るわね。」と。しかし、たまにと言つてももうここに来る用事はないのである。ボールは空をブウーンと飛んでいつてしまったから、ということなのだ。私は自分が飛ぶには重すぎた。背中におんぶする子供がいて、いつの間にか私の元で晩年を頼る実母もいて、そして殻だけこちこちに固い三十三歳の私がいる。「ありがとう。」私は女の子に言った。コンピューターのキーボードを叩いていた女の子が私を見て、にっこり笑った。私は経理課からロビーに出た。昼食をする時間は過ぎて、夕食をするにはまだ早い午後だった。小銭がガチャガチャと鳴る封筒がバーバリーのポケットの中でずっしり重かった。ふと私は、このバーバリーが二年前に彼と初めてデートした日に着ていた服だと気付いた。彼に会いに行った画廊の門が閉まっていたせいで、私は通りに立っていた。約束時間にちよつと遅れて来た彼は、私を一度さつと見回して軽く私の腰に手を置き、「このバーバリー、本当にいいねえ。」と言った。「私がデザインしたのよ。この服を買おうと売り場では女性たちが列を作るつて。」と私は言った。その頃の私は、もうこれ以上デザインすることが出来なくなるなんて想像できただろうか？

——私は彼と別れて互いに連絡を取らなくなった後に、彼の会社に電話をかけたことがあった。久しぶりに電話する若い後輩を装って、思い切り快活に声を張り上げて彼を尋ねた。そうすると電話の向こう側で、おそらく以前に彼が使っていた事務机と電話をそのまま使っている男がしばらく困惑したかのように一瞬沈黙をした後、「ご存じないのですね。その方は今ペルー支社にいます。」と言った。男は「そっちの電話番号をお教えしましょうか。」と尋ねた。私はまだ関係の浅い後輩のように、「いえ、結構です。そこまで必要ないです。」と答えた。その日の午後、私はずきずきと痛む親知らずと闘うこととなった。だからペルーは私の歯痛と同じになった。鎮痛剤を二時間間隔で四錠ずつ飲んで、私はその歯痛に打ち勝つことは出来なかった。——

ぐつと冷えた秋の気配が、ガラスドアの向こうでゆらゆら動いていた。太い幹の銀杏並木が葉を落とした街路は、黄色のカーペットが敷かれているかのようであった。早い午後、私はもう何もすることがなく、そこに立っているだけであった。以前ならば、私はこの場所でのように無意味に立っている人間ではなかった。私は人通りでも電車の中でも、街の人々の服を観察してその趣向が微妙な速度で変わっていくのを見ていたのだ。時には自分が人々の流行より先に行くこともあり、その時は販売戦略のために打ち出したデザインに流行が重い足取りで追いかけて来るのであった。だから季節というのは、私には短いスカートとともに来たと思ったら、直ぐに幅の広いスカートとともに去っていくものだった。「流れる川の水のように」ではなく、あふれ落ちる

滝のような無我夢中の日々だった。ところが今日の私は、銀杏の落葉が厚く積もった道をのんびりと眺めている。ひよつとしたら我が生涯初めて迎えた秋のようだった。銀杏の葉はもはや季節の変化を先導する色彩としてではなく、ただの銀杏の葉だったのだ。私は見たくない映画ポスターを何となく見る時のように、どういう訳か気楽な目で見ているのだった。ところで、誰かがさつきから私を覗き見るような視線を感じた。まるで数億年ぐらい前に深い愛を交わした男と偶然に視線が合ったような感覚。私は逆らうことの出来ない力に引つ張られたかのように、自分の視線を走らせた。通りに立っている似たり寄つたりの銀杏並木の中で、たった一本の木が目についた。ごく平凡なその銀杏の木から、私は視線を逸らすことが出来なかった。銀杏と目が合つて「十年ぶりだなあ、お前は今になつてようやく俺を認めてくれるんだねえ、ここに立つて十年の間お前を見てきた私を：」と言われたような感じであつた。そう感ずるや、おかしなことに風もない大通りでその銀杏がいきなり激しい落葉を始めた。突然のことだった。私はその木が落とす黄色い祝砲をぼんやりとした視線で眺めた。ポスターに描かれている静物画がいきなり動き始めたようだった。気を取り直すと、その通りに立っていた木々のうち、私にプレゼントでもするかのようにならぬ木だけが無数の葉を落としたということに気付いたのは、ガラス扉の前で誰かがポンと私の肩を叩いて足早に過ぎて行つた際に「あ、ごめん」という言葉とともにガラス扉を開けた時だった。ガラス扉の外で深まる秋がほろ苦い風とともに私のそばに押し寄せた時、いくら解雇されて気がぼうつとなつていっていても、銀杏の木と目が合うなんてことは起きるわけがないと自分自身に語つた。秋になつて葉を落とすのは、人類が誕生する前から銀杏がしてきたことだ。

銀杏は恐竜とともに生きたこともある樹種だ。ある銀杏の木が、群れから離れて解雇されたのと同然の恐竜と目を合わせて、その恐竜を慰めてやるために葉を落としたというのではないのだ。私は地下駐車場に通じる暗い通路に入って、ゆっくり階段を下りていった。

私には人生というものはいつも険しい坂道だった。たった一ヶ月を生きるだけのお金を稼ぐことがどれ程凄いことか、私に分かるようになったのは正確には離婚してからだった。子供は大きくなっており、もし今この仕事から追い出されたら、どこにも行く所がなかった。デザイナーの職場は限られている。衣替えの季節は一年に四回だけで、人々は普段は似たような種類の服を買って着るだけだ。それに活発で斬新な創造力をもった新しいデザイナーたちは一年に何万人も溢れんばかりに登場する。私は三十路を越えてから、食堂に座って他の人が列を作って待っているのを横目で見ながら食事している気分であった。人は私が出て行くことだけを願っていた。しかし私がある場を蹴って出たら、私はどこに行けばいいというのか。その恐怖が余りに大きくて、私は自分が解雇されるなんて考えないことにした。「大丈夫、全てはうまくいくのだ、まあうまくいくだろう。」私は、三本しか残っていないマッチを持って立つマッチ売りの少女のようにマッチに一本ずつ火を付けることはあっても、残っているマッチの数を数えることは絶対にしなかったのだ。

だから私はずうっと長くこの会社に残っていたかった。時おり辞めたいという言葉が喉から出て来そうになる時もあったが、最後の年金と月掛けの貯金のことを考えると、やはりこの会社にいるのがいいという計算をした。私は妥協しながら老いていくのだ。才能が底をつき、目は衰え

ていつて、段々と他人の機嫌を取ることだけが増えていくのだ。それでも我慢しよう。若い消費者たちの好みに合わせようと焦りながら。

——「子供の幼稚園入園金と母の歯の治療費をあんたが出してくれると言ってるけど、しばらくの間はやっていけるでしょう。けれど何年もせずに、あんたも結局は考え直すようになるわ。愛は冷めて、私たちがお互いをしょぼくれた目で見つめ合う頃になると、あんたはきつとこう言うことになるのよ、『どこかへ逃げて行きたい。さっさと抜け出して一人になりたい』なんてね。」

私はいつも早口でしゃべり、そして私たち二人はしょっちゅう言い争った。私は彼を自分の人生設計の中に組み入れていなかった。バツイチの私は三人家族の世帯主である。彼が三年間貯めた貯金を取り崩して二年ごとに値上がりするチョンセに充当するとしても残るのは辛い生活にか過ぎないのだから、私の言った言葉に大きな間違いはないのだ。それに彼の故郷には彼の給与支払日待つ老母と弟たちがいるのだ。だから彼がペルーの話を切り出した時、危うく笑うところだった。

「ペルーが何？」

と私は聞いた。そうすると、彼が何か魔法の国に逃亡でもしようかのように思えて笑いこぼれた。それにちよつとの間の旅行でもなく、三年間の支社勤務とは。

「そう、百回譲ってあんたと結婚して、まるで最初から子供連れの三人家族だったかのように、素知らぬ顔をしてそこに行つたとしましょう。あんたは自分の仕事をするでしょうが、私はそこ

で何をするの？　ペルーの語学学校に行つて英語の勉強をするというのも滑稽だし、後で食堂経営するつもりでイタリア料理を勉強しに行くなんてこともできないでしょ。あんたの母親と私の母が交代で手紙を書いてくるでしょ。みんな元気か、明けても暮れても心配ばかりしている、ということから始まり、結局はお金を送つてくれという話で終わる、そんな手紙。三年間休んだら、デザイナーとしての私の生命は終わりなのよ。感覚が完全に落ちてしまうから。そんな風に旦那について行つて韓国に戻つて来たら、家で何もしないで頭を掻いているだけの先輩は一人や二人ではないのよ……これまでそんな先輩たちの失敗を見るから、同じことをするのは、私の目の黒いうちは絶対にイヤ。ペルーは余りにも遠い国なのよ。」

彼は、私がこれだけのことを言いながらタバコを一本全部吸つてしまうまで、何の言葉もかけなかった。

「私は早く年を取るのよ。年金を貰つたら、まず最初にロッキングチェアを買うのよ。それをベランダに置いて一日中座っているの。時間がゆっくりと流れるのを感じながら、ずうっとそこに座っているのよ。……その時になつたら考えるでしょう。このように人生というのは空しいものなのに、何故あの時顔が赤くなるくらいに走り回つて働いたのか、私はそこに座つて自分の若い時の欲望をあざ笑うことでしょうか。けれどそれは、今の私にはそれが出来るという夢があるため、私は今のこの欲望を大事に考えたいの。少なくとも室長という地位に上がることと、それから少なくとも私の名前のついたブランドを一つくらいは作りたいという欲望。」

「生命は僕たちに多くのものを同時に持つことを、許しはしない。」

と彼は言った。

「若さと時間、そしておそらく愛までも。チャンスは何回も来るものではないから、それを見逃がすことは愚かなことだよ。僕たちはもう少し大きく目を見開いて、そういったことをゆつくりと一つずつ上手に生かして組み立てていかねばならないのだよ。それが生きることなんだ。非常に小さな幸せ一つを得るために人はどれほど多くの涙を流しながら生きるのか、お前は分かっているのか？ 本当に空しいことは、自分がどこに行くのかも分からず、何かに巻き込まれてしまうことなんだ。お前は年を取ってロッキングチェアに座ってそう考えて、泣くことになるぞ。」

私はしばらく黙って窓の外を見て、何も聞かないふりをした。私は無能な父の二番目の娘であって、そのせいで難しい人生をこれまで何回も経験してきたのだ。彼が独身で私が二歳の子供がいるバツイチの女だからではなく、またそんなことが私たちの結婚という社会的結合の妨害となることの恐ろしさでもなく、ただ彼がのんきに遠い国に行こうという話を切り出したことが不快だったのだ。私が前夫と結婚する時もそうだったのだが、情熱一つで、そして単に愛という名前前で、だから僕たちまだ若いものだから努力すれば出来ないものはないという純真な顔をして迫ってくる彼がどれほど恐ろしく思えたか分からない。人生はたくさんの傷跡の塊であって、スウェーデンの子供たち全てが幸福でないように傷跡の程度はお金で決められないということ、そして人の傷跡は人の顔の形ほどに違うということが分かっている、それでも私は彼にはいつもそんな態度を取った。

「お前はお金のことばかり言う、そんな顔をするお前が俺は嫌だ。」

と彼は言った。私もお金ばかり言うのはもちろん嫌なことであった。この世にお金よりも重要なものがたくさんあるのだから。しかしお金より重要なものが確かにあるが、その存在は余りにも小さいということなのだ。私は早くからそれを知って育ってきたから、ひよつとしてそれを忘れてしまうのではないかと思つて、何回もその事実を言い聞かせてやつた。前夫と私の結婚生活もお金の計算で終わつた。チョンセの住宅を持てるだけの慰謝料と養育費をめぐつて私と前夫は熾烈に闘つた。その闘いは、子供のことで離婚をするのかしないのかで争うことよりももつと露骨でもつと深刻だつた。私は前夫がそれほどにお金に執着する人間であるとは思わなかつた。離婚をしなかつたなら、私はおそらく他の人にこのように言つただらう、「夫はお金について元々無邪気な人なのよ」。そんな経験をしたものだから、旅行や人生は歳月と愛と希望を組み立てることだなんて思い込んでいる男と一緒にペルーに行くことは、私にはロッキングチェアに座る銀髪の年齢になつてからするものなのだ。感傷あるいは憐憫で行動するには、私はもう年を取つてしまつた。彼は大学卒業の頃に負つた失恋の深い傷跡のために海外の支社で五年もの間自分の青春を噛みしめながら過ごしたと古びた居酒屋の御座敷席で恥ずかしそうに切ない告白した時、私は実はあくびをしたかつたのだ。

「その女と結婚していたなら、多分あんたは傷跡を拭い去るためではなく、その女と別れて暮らす自由さの故に五年さすらつていたでしょう。そこで踊りながら飛び回つていたかも知れないわ。愛だとか結婚だとか、それはそんなものよ。永遠というのは、誓いのその瞬間だけにあるだけなのよ。」

私はくすくす笑ってパーバリーの服に酒をこぼしそうになった。そして彼を見送ってからも、私はしばらくの間平然としていた。全ての存在はそれぞれが悲しいのだ。その分量くらい涙があふれ出て初めてこの世を再び見るものだと。あんただけが悲しいのではなく……

——「誰も相手側の目から流れ出る涙を止めることは出来ないが、少なくとも僕たちは互いに見つめ合って涙を拭ってやる事が出来るね。僕たちの人生で必要なものは、ただその涙を拭いてやる人間だけなのだから。お前が僕に、そして僕がお前に、そんな人になったらいい。」

最後に私たちが会った日、彼は私の車に乗ってそのように言った。

「あんたの涙を拭いてやる前に、私はせねばならないことが余りにも多いのよ。」

と私は言ってしまった。私は泣かなかった。怖かったのか、時には私も彼が持っていたその空しい誘惑に落ちたこともあった。彼と一緒にならば、おそらく幸せのようなものを捉まえることが出来たかも知れないと考えることもなかった。私は約束したカフェの入り口から彼が新聞を几帳面に見て座っているその横顔を見た時、その熱中している姿勢と慎重さに胸がしびれて、ちよつと考えたりもした。彼に似た子供を産みたいという考えを。そんな時、私はまたそのカフェを出て遠くを歩き回った。そうして顔が冷たい風にしびれる頃になってから、約束よりずっと遅い時間、間に彼の前に現れて言った。

「急な仕事があつて。時間がもうこんなに過ぎるとは思わなかったわ。」

私は地下駐車場の階段を降りる間に目が闇に慣れ、自分の車に向かった。ふと子供の面倒を見

てくれている母親に電話を掛けねばならないと思った。今日は家に帰るのが遅くなると。東大門や広蔵市場に出掛けて、付属品に使われるボタンや特異な形のジッパーやレースを選ぶためではなく、百貨店に出掛けてわが社のブランドのどの服がどの階層にどのような選好度で売られているか調べるためでもなく、今日一日は仕事のためでもなく子供のためでもなく母親のためでもなく、ただ私のために使いたいと母親に言いたかったのだ。そうすれば、子供は私を待ちながら寝るのだった。寝る前に、最初からなかったレゴの汽車の車輪が一つなくなると祖母に駄々をこね、我慢してなだめる祖母に結局はお尻を一発叩かれ、オンマが帰るまで絶対に寝ないとオンマの帰り道が見える寒いペランダに出て意地っ張りになって立っているのだった。それからとろんと瞼が重くなった目をこすりながら、私のいないベッドに入り込むのであった。そんなことを繰り返しながら、子供も段々分かってくるのであった。人がいない空白も自分の人生の一部だということを、そして待つのはいつも同じ時間ではないことを、また離れたと思う母の心と会いたいと思う子供の心はいつかどこかで出会うといってもこの世では決して成し遂げられないということを：私は携帯電話を取り出した。解雇されたせいだろうか、通じないことは分かっているはずなのに、私は平静を失っていたようだ。それでなければ携帯を取り出さなかっただろう。携帯は赤色を光らせて「ノーサービス エリア」という文字が出ていた。当たり前だ。この地下、この土の中の奥まった所では誰とも通信できない。地上の電話線とお互いに物理的に繋がっている公衆電話ならいざ知らず、目に見えず触ることも出来ず感じることも出来ないような電波に頼る通信はあり得ないことなのだ。そういえば今の私の人生は、この地球上どこに行っても「ノー

サービス エリア」だ。逃げ場所はない。そうすると意外にもまず最初に私の頭の中をよぎったのは、早いうちに他の所に就職口を探すか、そうでなければ南大門市場に店でも開いて自分のブランドを作るか、あるいはお金持ちの男と結婚しないとしたら一番最初にこの携帯を売ることになるだろうと思った。そう考えているうちに自分の車が見えてきて、その次にはあの車を売る順番になると思った。そうしたら、化粧台の引き出しの奥深くに入れて置いた子供の一歳祝いで購入した金製の腕輪と指輪を売る順番が来るだろうと考えた。二部屋の家から一部屋の家に移すこととなるか、そうでなければ年老いた母親の目ほどにものが見えない薄暗い半地下式の部屋に引きこもるのだ。彼が知っている私の連絡先はこの携帯電話の番号だけなのだから、おそらく携帯を売るにしても半地下式の部屋に移るにしても、彼と私とがこの地上で出会うことの出来る最後の通信手段が消えてしまうのだ。彼と私を繋ごうと苦労してきた人生は、その時からいつまでも「ノー サービス」という赤い光をまばゆいばかりに光らせるのだ。そうなると希望がなくなる時におそらく、私を、売る、ように、なる……と考えた瞬間、そういえば私は自分の魂を売らなかったと思った。新しいもの、もう少し目を引くもの、もう少し消費者の嗜好を満足させるもの、そんな服を作り出すために私はこの世に生まれ、各種の色彩と図形を考え出してきた。最初の頃は私自身が幸福になるためにデザインナーになろうとしたが、今はデザインナーという名前を維持するために私は自分の身も心もなげうった。映画を見る時も衣装が一番最初に目に入った。あの女のブラウスはシンプルでいいのだが：と、いつの間にか映画評論家になっていた。テレビの歌謡番組でも、私は歌手の歌を聞くではなくその服装に注目した。流行の先頭に立つ歌手たちの

姿を見逃すまいと目を凝らしておかねばならなかった。私は生きていくためにデザイナーになったのだが、今はデザイナーの地位を逃さないために生きるようになった。新しいものを、もう少し新しいものをという言葉自体が、私には古くさい言葉になるほどだった。私は何年もの間、一番に売り切れになるような服を作り、また安売りセール売り場には絶対に出ないような服を作るデザイナーとして会社から表彰を貰うほどであった。しかし誰かが近寄ってきて「もう走るのを止めたらどうなの、ボールはもう空に飛んで行ってしまったのだよ、近頃のボールは羽が生えることもあるんだよ。」と言った時、これまでの全てがそれで終わりとなった。――

私はポケットからキーを取り出した。その時、ぴかっと光った光が私の車に向かって行き、続いてパン！という破裂音が聞こえた。非常に短い時間ではあったが、最初のうち私はそれがどんな状況なのか、到底分からなかった。ただ光が近づいて続いてパンという音だけが聞こえただけだったから。黒い中型車からある男が降りるのが見えた。その時になって初めて、私はその男の車がスリップして私の車と衝突したことに気付いた。今中古市場にあの車を出しても一ヶ月の生活費も充当できないだろうという考えがまず最初に頭をよぎり、続いて良い事は一つずつ来るが悪い事は集団でやって来るといふ格言を思い出した。私はゆっくり自分の車に近付いた。そして車のフロント部分がペチャンコになっているのを見てからぶつけた男に顔を向けた時、私は意外にも笑ってしまった。その男が、まるで解雇された恐竜のために自分の葉っぱを落とそうとする銀杏のような顔をしていたからである。

「どうってこと、ないですよ。ちよつと凹んだねえ。」

私はこの世で一番寛大な女人の顔をして、男が傷つけた私の車のドアを開けながら言った。

「大丈夫なんだから。ドアも開くじゃないですか。」

「床が、ここが、つるつるしていたんで。」

男は私の反応が信じられないかのように、ちよつと口ごもりながら言った。

「つるつるしていた……この床がつるつるしてたから、私も今滑ったんですよ。」

私はハイヒールを履いた足で床を何回か小突いて言った。分からない解放感というか、今のこの時間、何故か私は限りなく寛大でありたかった。「何事もないですよ。それ、大したことでしょうかね。そうだとして、誰かが死んだということもないじゃないですか。大丈夫ですよ、大丈夫。」誰も聞いていなかったが、そのように声を出したい異常な気分になった。

「お忙しいなら今処理をしましょうか。ちよつどの近くに私が知っている自動車整備工場があります……」

男は、どのようにしたら御免なさいというこの気持ちを表現できるのか、というような口ぶりで言った。

「忙しくないです。」

男がしばらくの間、考えと時間とが止まったような表情で私を見つめた。その瞬間、異常な感覚が私をかすめて行つた。このようなことが、いつだったか以前に起きていたような……記憶をたどる前に男が言った。

「分かりました。私について来て下さい。」

年が三十をちよつと越えたぐらいか、私は男の車について地下駐車場を出た。男が右ウインカーを出せば私も右ウインカーを出し、男がブレーキを踏めば私もブレーキを踏み、彼が左ウインカーを出せば私も左ウインカーを出して、私は男について行った。

私の車にはあちこち擦った跡があり、当たって凹んだドアはそのままであった。私が運転を始めてから走った道は色々だったように、今自分の車に刻まれた傷跡も色々だった。最初はつやつやしていた新車のバンパーを誰かが擦った痕跡を家の前の路地で見つけた時、その夜は眠れないほどに怒った。そして二回目は地下駐車場で私の車のドアが激しく当てられてメモ紙一つ残されていなかったのを見た時で、自動車整備工場に車を持って行ってお金がどれだけかかってもいいから新車のようにしてくれと泣くような顔で言った。そして続いてまた車がぶつけられた。今度は整備工場に行かなかった。ただ私の車に当てるおいて逃げた人間が誰なのか分からず、交通事故でも起こしてペチャンコになってしまえと一人で悪態をついていたのだった。しかし日が過ぎ、傷が多くなつていくと、今はそれがいつどこでついた傷なのか見分けることすら出来なくなつた。私はもう怒りもせず、悪態もつかない。そして幾日かが過ぎると、私もどこかで人の車をこつそり当てておいてこつそり立ち去ってしまうかもしれない、その車の所有者は夜も寝られず、悔しくて私に向かって怒り、悪態をついているかも知れないのだ。だから男がいきなり速度を上げて後ろから付いてくる私から姿をくましましたり、さもなくば黄信号から赤信号に変わるギリギリのところまでピューっと速度を上げて、赤信号の前で止まる私を置いて一人逃げてしまったとしても、

それほど悔しいことではなかった。光化門の広い車道で車線変更するたびに、もしや私が付いて来れないかと思つたのかウインカーを出してくれるので、私は少しゆったりした気分ですら付いて行つた。曇つた秋の日だった。空は灰色に沈み込んでいて、黄色い銀杏が鮮明に見えた。さつき私と出会つた銀杏の木を探してみた。その木の下にだけに銀杏の葉っぱがうず高く積つていたので、すぐにその銀杏の木を探し出せた。もう一度、今度は好奇心でその木と目を合わせようとしたが、木は私に目もくれなかつた。「それは一生にたった一回のチャンスだけだ」という冷ややかに言つているようだった。私は空しい気分になり、その銀杏の木が落とす黄色い残骸物をタイヤで崩しながら走つて行つた。「秋は、そして春は万物が動く季節だ」と彼が言つていた。「一つは完全な消滅に向かつて、そしてもう一つはいつぱいの緑のために。だから春には乙女が、秋になれば男が揺れるのだ」と。今は秋だから、彼の心も揺れているのだろうか。厳しい酷寒の季節がもうすぐやって来ると彼はペルーでも考えるのだろうか。徳寿宮の前では、新婦たちが似たようなウェディングドレスを着て立っていた。もしワルツが流れてきたら舞踏会を開いてもいいほどだった。そしてその横には遠足に来た幼稚園の子供たちが黄色い帽子を被り、草色と黄色の混じつたコガネムシのリュックを背負い、若い先生の顔をみながら一列に座っていた。そしてまたその後ろには薄茶色の石塀の上に故宮の木々の枝が張り出していたが、その時私はまた見てしまつた。その後ろに黒く垂れ込めた重い灰色の空を……。

男の車は徳寿宮横の路地に入り、昔の裁判所跡を過ぎて小さな自動車整備工場の前に止まつた。「車を修理する間、お茶でも……いかがですか？」

彼が尋ねた。普通こんな場合、事故を起こした側がお金を出して立ち去るのが通例であるので、ちよつと訝しい気分であつた。

「そうですね……」

「悪く考えないでください。私のために遅くさせてしまったので。私一人がそのまま行ってしまふのが、どう言えいいのか、申し訳ないんです。」

自分がする仕事は自分が分かつてやるものだし、自分が行く道は自分で行く気持ちで生きていた私は、訝しい表情を抑えて男について行つた。車が直るまでの間、特にすることもなかつた。ただし「あんな風に生きるなら、あの男もきつと解雇されるだろうなあ」と思った。いや、そうではない。男はひよつとして既に解雇されていたかも知れない。あんな風に毎日ごめんなさいという表情をしていたならば。自分が犯した小さなミスに対して、それは実は自分のせいではないという図々しい表情をつくるのが出来ないならば、という話だ。今度のことにしても、文句を言えることは幾らでもあつた。つるつるした床と、よりによつて通路に駐車しておいた私の車の中途半端な位置と、そして薄暗い地下駐車場の明かりに。

光化門の方にちよつと歩いて行くと路地に出て、そこに「存在は涙を流す」という長つたらしい名前のカフェが見えた。席に座つた彼は目が悪いようで、ちよつと目を細めてメニューを見てマチュピチュ()という名前に指を当てる。カクテルのようだ。しかしマチュピチュという名前を聞いた時、私は胸の下あたりに若干の痛みを感じた。「だったら同じもので。」と私は言った。二人だけで向かい合つて座ると、彼は気まずいような表情で両手をこすり合わせた。私がタバコを

取り出して口に啜えるや、彼は気まづさから脱しようとするかのように、ポケットからすぐにライターを取り出した。カシヤツという綺麗な音が聞こえた。

「デュポンですか？」

ライターを見て、私が尋ねた。男が肩をちよつと得意げになって、

「ご存知なんですね。この音、いいでしょう。タバコはしないんですが、この音が好きで持ち歩いています。」と、タバコが吸えないのが恥ずかしいかのように言った。

——彼の三十一回目の誕生日に、私はデュポンのライターをプレゼントしたことがあった。雪が降りしきり、ソウル市内の交通がほとんど麻痺した日だった。夕食を食べに川沿いに出かける予定を取り消し、私たちはやつとのもので車を運転して彼のアパートに行った。彼の頭にも私の頭にも雪が被った。私たちが長いキスを終えたころ、私は彼の胸に抱かれたまま彼の髪の上にある白い雪が小さな水滴に変わるのを見ていた。彼の頭の上にまた白い雪が降り積もるぐらいに彼と一緒にいたいという希望が、古傷の記憶のように私をよぎっていった。——

私は男が差し出したライターでタバコに火をつけた。ライターを閉じてから特にするともないからというような表情で、男は私がタバコを吸う姿を眺めていた。彼もタバコを吸わなかった。彼は私がタバコを吸おうとすると、いつもそのライターで火をつけるのを好んでいた。

「マチュピチュに行ってみたことがありますか？」

密林の夏のような深緑色と赤紫色の他に、何とも言えない赤色が何層にも重なっている派手なカクテルが運ばれてくると、男が尋ねた。私はゆっくり横に頭を振った。

「僕は何日か前に、そこからこっちに来たんですよ。」

男はグラスを手に持ちながら言った。その時私は車の修理が終わっていなくても、このグラスを空ければこの場から出ようと思った。解雇された秋の日の午後、携帯電話とペシヤンコになった車と子供の一歳誕生日祝いの金製指輪まで売ろうと考えている時に、この面識のない男と向かい合つて座り、マチュピチュがあるペルーの話をするとするのは、気乗りしないのだった。選りに選つて何故ペルーで、しかも何故マチュピチュなのかということだ。

—— たつた一回送つてきた彼の葉書には、シルトック(シ)のようなマチュピチュの絵が入っていた。「ちよつと時間ができてマチュピチュに立ち寄つた。首都リマから一時間、南東の方に飛んできたんだ。そこから百キロほど北西に離れているウルバンバの険しい山岳地帯の中に『老いた峰』マチュピチュと『若い峰』ワイナピチュがある。この二つの山がつながる所には、空に飛んで見なければ全貌が分からない『失われた都市』があるんだ。人口が一人ぐらいのインカの都市だが、いっどうして建設されたのか、いつ人々が離れたのか、知るすべがない。すべてのものが伝説の中に埋もれているのみ……」私は彼が送つてきた葉書を三回ぐらい引き裂いてゴミ箱に捨ててしまった。彼が何故マチュピチュに行つたのかなんて知りたくなかつた。若い峰と老いた峰、そして鳥のように空に飛ばないとその姿が分からず、今は誰も暮らしていない失われた都市……

人々はみんなどこへ行ったのか。人々はそのような都市をなぜ苦勞してつくったのか。彼はおそろくそんなことを考えているのだ。いやひよつとしたら彼はそこで、ママ事遊びに使うような小さな土産物を持ち歩いて外国人観光客に売る幼い少女の、その小さく粗雑な商品を全て買って自分のカバンに入れ、その少女を自分の膝に乗せて髪の毛を編んでやっているかも知れない。彼はそんな人間だった。いつだったかベトナム支社に勤務した時も、彼はトンキン湾で出会った少女の品物を全て買ってやったと言っていた。彼の家の飾り棚には取るに足りないそんな土産物品がずらりと並べてあった。みんな合わせても何円にもならないような品物を売るために小さな子供が苦勞しているのを見ると痛々しかったからと。私はゴミ箱からまた葉書を取り出してみたが、葉書は形も分からなくなるまで切り裂いてしまっていた。「向き合う力がないのなら帰れ、逃げられるところまで逃げろ」それが三十数年の間生きていくために私の得た唯一の眞実であった。――

「あのー、結婚しておられるのですか？」

男は他に言う言葉がないかのように言った。

「はい：：今は一人です。」

すぐにこの場を離れるつもりをしていたために言った言葉だった、言わなくてもいいことを付け加えたのは。男はしばらく頭の中が混乱したように首を傾げると、ちよつと馬鹿になったように「ああ」と言つて笑つた。

「つまらない質問をしましたねえ。」

男は本当にすまなさそうに言った。私は窓の外を眺めた。路地が見える窓には秋風が吹いているだけで、誰もいなかった。何本かの銀杏の木が葉っぱを落としていた。私はその銀杏を眺めていたが、その銀杏は私と目を合わさなかった。そもそも銀杏の木と目を合わせるのを願うことが最初から間違った考えだった。打ち解けずよそよそしい人に言葉をかけようとしたら返って恥をかかされたように私はすぐに視線を避け、カフェの中を見渡した。客は私たちだけであった。

店の主人は私たちにカクテルを運んできてどこかに消えてしまい、ガラス窓ばかりが大きいカフェは金魚鉢みたいで、もの寂しかった。

「ところで、どうして離婚されたのですか？すみません。こんな質問……そうですが、私はまだ結婚していないんです。」

私は吸っていたタバコをもみ消し、男を見た。まあ、こんな質問はこれまで一度や二度でのことではなかった。

「さあねえ。私が側にいなければその人、死ぬかも知れないと思って結婚したんだけど……暮らしてみたら、その人が側にいると私の方が死にそうだったのよ。」

言葉を終えて私はちよつと笑った。しかし男は笑わなかった。その代りにグラスを手に持って一口飲み、かなり固い表情をした。

「おかしなことなんですわねえ。何時だったか、ある女性が私に同じ話をしたんです。一年ぐらい前、私がペルーに行く時に別れた人なのですが……。」

男は言葉を終えてにやつと笑った。しかし私は笑わなかった。あの彼も今地球の反対側にあるペルーのカフェの片隅で、ある女とこんな会話を交わしているのかも知れないと考えていたのだ。そうすると、ふと胸の片隅にまた痛みを感じた。ペルーから来たこの男が、あの彼がペルーである女と差し向かいで座って私のことを話題にしているのを見たと言っているようで、あの彼への怒りが込み上げたのだ。私は急にこの男と親密になりたい気分になった。

「辛かったです。」

その男はカクテルの丸いグラスをくるくる回しながら淡々とした表情で言った。

「辛いお気持ちだったのですね。」

私は出来るだけ優しく男の言葉を受けとめた。

「本当にそうお考えですか。私が本当に辛かったのは、その彼女はひよつとして全然辛くなかったのではないか、彼女にとってはまだ全てのことが終わったただけだということではないか、という気持ちになった時ですよ。」

言葉を終えた男の唇が、我慢していた悲しみによって歪んでいくように見えた。

「そうですね。失恋した友人がやって来て、こんなことを言った時がありました。雨が降る日でした。私が慰めてあげると、その友人は降っている雨をしばらく眺めてこう言ったんです。『それでも同じ空の下で暮らしていて、私が見ているこの雨を彼も見ているかと思うと、ちよつとは慰めになる。』」

分かりますかというように私は男を見た。男は丸い目玉を大きく開き、分からないというよう

な顔で私を見た。今の話にあつた失恋を訴えた友人のように、もう少しありふれた言葉で私を慰めてくれないのか？という顔であつた。仕方なく私がまた口を開いた。

「ペルーに旅立つたなら、その女性は寂しいじゃないですか。寂しいということなんですよ。今降っているこの雨を彼も見ているのかどうか、その女性は分からないのだから。ここで雨が降っている時にペルーのある都市では乾いた砂嵐が吹いているかも知れないし、ここで雪が降っている時にペルーの人々は海水浴に出かけているかも知れないし、ここではうららかな日なのにペルーでは暴風雨に遭つた鳥たちが集団死しているかも知れないのだから。日本でもなくアメリカでもなく、何、フランスでもドイツでもなく、新聞にある世界主要都市の天気予報にも出てこないペルーです……お分かりになるでしょう。私が今食べているうどんを彼も今頃食べているのだろうかと思ひやることも出来ず、私が今聞いているこの歌をどこかで彼も聞いているだろうか、そう思ひやることも出来ず、二人でよく歩いた道を歩きながら一度ぐらひは私を思ひ出してくれているのだろうかと思ひやることも出来ず……辛かつたでしょうねえ。いつでも見送る人の方が辛いのですから。去る人は体を持って行くだけです、見送る人はその人が出ていって残したもののなかから毎日その人の髪の毛一本を探し出す気分で生きるのですから。彼が座っていた車の座席や彼が服をかけていたハンガーなど彼が触つた全てのものが、どんなことがあつたとしても、彼の不在を証言するだけです。同じ風景、同じ場所、そこからそのまま抜けてがらんと空になつてしまつても、彼についての記憶だけがぎつしり満ちているでしょう。その女性が辛くないなんてことがありますか。」

男は小さくうなずいた。しかし特に慰められたという顔でもなかった。ふと、自分一人が空しく熱を出したのかという気分になった。

「タバコを吸う女性を見ると、その女性を思い出すんです。タバコを吸う女性はこの世には多いんですが。」

男の頭がタバコの煙のなかでうつむいた。男はしばらくうなだれて、バーバリーの裾をいじりまわすと、一人物思いに耽った。

「そうなのねえ、生きるというのは……タバコを見て思い出し、南山を見て思い出し、しかしそれはタバコのせいでも南山のせいでもないのよ。」

首をうなだれていた男が、何を言っているのかというように目をぱちくりさせた。私ばかり笑った。男は分からないのだ。

——南山の麓にある彼の小さなアパートに初めて行った時、カーテンを開けるとぐっと迫る南山のタワー。夜になればベルシアの王子が被る宝石帽子のように暗闇のなかにうっとり光るそのタワー。彼が寝巻にしると渡してくれた彼の古びた綿のTシャツ、休日や土曜日の午後、私は彼のその大きなTシャツをワンピースのように着て、腹這いになってガリガリの足を互いにつけながら映画を見て、コーヒーを飲んだ。彼はそのTシャツをペルーに持って行ったのだろうか。Tシャツは私の前から消えてかなりの月日になるが、何度も洗ってよれよれになった袖の色褪せた草色は、子供を寝かして寝巻に着替える時にいつも私の腕がそれを記憶していた。……その色

褪せたTシャツがあつた彼の家は今も南山の麓にあるが、だから今は他人がその家でラーメンでも作つて食べて暮らしているだろうし、時々窓を開けて南山タワーを眺めているだろうが、会社の帰りに彼と会うために私が歩いたその坂道と、タクシーから降りた私たちがキスをした暗い路地と、二人でよく行つた貽貝鍋を食べさせる店は今もそこにある。タバコを吸う女をどこでも見ることが出来るように、南山もソウルのどこからでも見える。もつと言えば、高速道路を走つてまだソウルに入る前でも漢江越しの遠くに南山タワーが見える。私は生粋のソウルつ子だが、南山タワーがそのようにソウルのどこからでもよく見えるということを知らないでいた。記憶は頭でするものであるが、思い出は心でするものだから、私の心の中のタワーは毎日明るく照らしていた。しかし結局私は南山タワーに捨てられた女だった。――

「ペルーに行つても、彼女の会社にしよつちゅう電話をかけましたよ。」

男は大体ペルーとソウルの南山とが何の関係があるのか分からないという表情をして、今度は自分の考えに酔つたかのように言葉が続けた。

「私からの電話をとつたら冷淡な態度をするので、彼女が退社して会社に誰もいない、そんな時間に電話をかけたのですよ。彼女がいない彼女の空間に電話をかける気分というもの、理解してもらえないでしょうか？」

もじもじしていた男が澄んだ眼を開いて、私を正面から見て尋ねた。いきなり目が合つてしまったので、私は視線を避けた。誰もいない事務室で鳴り響く電話の音、誰もいないことを知りな

がら電話をかける心情……私は誰もいない路地を見た。地面に落ちた銀杏の葉のために黄色い光だけが明るく光っていた。

「彼女は自分と一緒に悲しんでくれる暖かい心を持った誰かがいることを信じようとしなかったのですよ。ある時、結局すべてのものを終わりにして生きようとしたようです。それでも私は切符を二枚準備して待ちました。ペルーはビザがなくても行ける国ですから。しかし空港には彼女は現れませんでした。携帯電話をかけても『恐れ入ります、今はお繋ぎ出来ません』と言うだけだったのです。そして今日彼女の会社に電話を試みたんですが、辞めたというんです。実はさつき電話をしようと駐車場に入ったのです。彼女の会社が近所なんです。私がペルーに出発した後、彼女は引越したみたいです。新しい電話番号も知る方法もなく……。」

——彼がペルーに出発してから会社から電話がかかって来たことが一度あった。声が余りに近くに聞こえて、私は彼がペルーにいるという事実が信じられなかった。最後の接触を試みようとする悲運の捨て子のように、彼は「書いてよ」という言葉で通話を始め、自分の居所を知らせる暗号のような長い電話番号を読み上げた。その時スタイル画を描いていた私は、彼の電話番号が虚空からの音として空しく、自分の描く絵の中のスカートの鋭い線なかに消えいくのを見ていた。結婚は愛の完成だと誰が私たちに教えてくれたのか。私はその時、この世には実在しないでスタイル画の中にだけモデルとして存在する十等身の女性のスカートの裾の上に、彼の電話番号の代わりに「完成」という単語を無数に殴り書きしていた。——

「会社の同僚が耳打ちしてくれたのですよ。ある女が同じ声でしばしば電話をかけてきて、私を探しているというのです。それでペルーの電話番号を教えてやろうとすれば慌てて電話を切ったというんです。私は何故かそれが彼女だと思っただけです。あの、気まづくなられましたか？私の方が負担になってませんか？」

「そんなことはないです。大丈夫です。」

しかし大丈夫ではなかった。私はみぞおちの下あたりに痛みを感じていた。私は麻酔剤代わりにアルコールを飲んできた自分を思い出して、カクテルを飲んだ。昼に飲むお酒のためなのか、気分がちよつと軽くなるようだった。私はさらに一口飲んだ。軽くなりたかった。軽くなって更に軽くなって翼が生えるぐらいに。マチュピチュ神殿の形を真似て作ったカクテルの草色と赤紫色の層が小さなグラスの中で少しずつ崩れ落ちて、今ほとんど形を見分けることが出来なくなっていた。

「鳥はペルーに行つて死ぬんですってねえ？」

身体が軽くなると、この席から離れようと焦る気持ちもなくなっていた。私が話題を変えた。男がにっこり笑いながら、カミソリ負けの痕が残っている顎を軽く撫でた。

「ロマン・ガリが書いた小説の話ですね。どこでも鳥は死にますよ。そして鳥の雛がまた誕生するでしょう。ペルーについて何か気になるのですか？」

「いいえ。私はペルーについて何も知らないですよ。」

「知りたくないと思っておられるようですね。死ぬみたいで。」

男は笑った。私は笑わないでタバコをまた口に咥えた。男が銀色のライターを取り出して、タバコに火を付けてくれた。男のグラスの中のマチュピチュもほとんど形を見分けることが出来ないほど崩れていた。しかし私が飲んだマチュピチュは胃の中に入って鮮やかな草色と赤紫色に再び重なっているようだった。カフェには他にお客はいなかった。低い音の音楽も終わってしまったが、店長は現れないで、カフェはお墓の中のように静かであった。私は時計を覗き込んだ。整備工場の店長が言っていた時間になってきた。

「昔私が好きだった本の最初の一節は、こうだったんです。『この世で変わらないたった一つの真実は、全てのものが変わるといふ事実だけである。』そこで、さっきあなたがおっしゃった言葉を思い出します。そうなんです。最初に私はその真実がなければ死ぬだけでしたし、今その真実を大事にすれば私がここで死ぬだけです。その本は真理を語っていたのです。全てのものは変わる。私はその一節だけ除いて、その本にある全てのことを信じていました。その本が私に与えた真実は、真実であることだけは変わらないのだと愚かにも考えていたのです。世に、この世にいつも変わらないでそこにいてくれるのが一つぐらいあればよかったです。それが愛であれ、人であれ、真実であれ、あるいは私自身であれ：私は何かに依存して立ちたかったです。存在というのは元々止まりたがるのですから。だから私はペルーに行きました。」

「車が、車が直ったようですね。」

私は男の言葉を遮った。男はちよつと失望したような表情をした。

「いきなり私の言ったことが負担になられたかと思えます。すぐに行きます。私もすぐに行かねばならない時間なので。まだいたかったのですが、そうはいきませんから。それでももう一言だけよろしいでしょうか。」

男がいら立った目つきで私を見た。「変な人ねえ」私は時計を覗き込んで、話が少しでも長くなれば直ぐに行きますよという表情をした。

「すみません。お宅を見た瞬間、しかし何故かこの言葉を差し上げたくなかったです。愛は完成されねばならない、そんなことはないんです。革命がそうだし、人生がそうであるように。私は完成ではなく終わりを見たかったのです。手で触れたり目で見えたり出来なかつたら、最初からなかつたのと同じだということ。中間が存在し過程も存在しますが、実は人生というのは正にそんな過程であるに過ぎない、ということ。人生すら完成できないのですよ。私は焦って最後のところに触れたがる彼女を、愛したのと同じぐらいに憎悪しました。終わりが見えない自分の希望を愛し憎悪したように：だから彼女がいなくてもペルーに行くことができました。」

私は席から立ち上がった。男はしばらく沈黙して、ちよつとしてから立ち上がり支払いをした。男がお金を出す姿から何となく顔をそらすと、藍紫色の絵画が目飛び込んだ。壁の上に、形が崩れていく一人の人間が立っていた。男なのか女なのか分からない存在、今こちらを見ているのか、さもなければ背を向けて離れて行くところなのか分からない、そんな存在。存在は地面に足を付けなのまま立っていた。何故なら、藍紫色と黒色が混ざった地面は渦巻いていたからであった。何故だったのか、私はふいに頭の中を「死」という単語がよぎるのを感じた。しか

しその絵画の下に書かれた題目はこうだった。「存在は涙を流す」 瞬間、下腹がざぶんと音をたてたような感じがした。上下に並んだ引き出しが、さっきこの男に会った瞬間から上から下に順番に開いていき、これまで一度も開かれなかったその一番下の引き出しがぎいっと音を立てて開き、そこに入っていた私の内臓が、私の存在を肉体にしてくれている内臓が塩漬けされたようにくねらせ、鈍重なうずきが私の背中をこわばらせて、かすめていった。

「ここでお別れしなければなりませんね。」

カフェの前の路地に出ると男がこう言った。私は彼が足で踏んだ黄色の銀杏の葉を見た。かつては輝いていたが今はほこりが薄く被っている彼の古靴と、またかつては鋭くまっすぐな折り目のあったが今はよれよれの彼の古ズボンの裾：端正な紺色のバーバリーが膝まで垂れていた。バーバリーの上に首を載せた彼の顔は意外にも永遠の静かさの中に沈んでいるように非常に悲しく見えた。「そのように生きてはダメですよ、そのように生きれば辛いです」何故なのか、私はまるで親しい後輩のように言い聞かせたかった。彼が近寄って来て、バーバリーを着た私の腰を軽く撫で下ろした。私は男を知らない処女のように慌てて一歩後ずさりしてすぐに軽く目礼をして後ろ向きになった。そうすると、手の指が語り始めた。さっきから、心の一番下の引き出しが開かれるのを感じた時から大声を張り上げる私の指の誘惑を一度ぐらい聞いてやりたいと思った。私の車に傷を負わせた彼に寛大であったように、私の手の指にも寛大であろうと。私は携帯を取り出した。そして昔から私のために苦労していた私の唇にも一度くらいはチャンスを与えてやりたかった。唇は私の許しを信じられないというように小さく震えた。

——「彼のペルーの電話番号を知りたいのですが。」

「どうしましょう。あのー、その人は行方不明なのですよ。一週間経っても何の連絡もありません。しばらく旅行に行つて来るといつて軽装で出かけたのですが、アパートも空っぽにしていて、完璧に消えたのです。絶対にそうする人ではないんですが。そこでは暴風がすごかったそうです。暴風が過ぎてから、生き残った人たちはみんな山や海から脱出したのですが、その人はいなかったのです。現地の警察と大使館が調査を始めたのですが、まだ探せていないのです。」

相手方はどもりながら言った。まるで彼が行方不明になったのが自分の間違いであるかのよう
に言った。電話を切ることも出来ず、私はふとあの男が消えた路地の方を眺めた。一本道で長く
伸びた路地には、誰もいなかった。私は気持ちを高ぶらせて彼が行つた方の路地を歩き、大通り
に飛び出した。彼はどこにもいなかった。消えたのだ。車がわーんと音を立てて通り過ぎ、遠足
を終えた幼稚園の子供たちがきやつきやつと騒ぎながら通園バスに乗っていた。写真撮影を終え
た新郎が、長いドレスがままならないでいる新婦を連れてにっこり笑いながら私の前を通り過ぎ
た。今は希望で輝くこの道を、あなたたちも何時かは絶望へ歩いて行く日があるのだ。しかし希
望で輝くことのなかった道は、決して絶望に至ることはない。それは道のせいということでは
ないが、警戒せよ！その気まぐれの人生の筋道を。いつの間にか音楽が止まって舞踏会が終わっ
たように、耳の中へ静寂がしみ入っているのかも知れない。だから再び警戒せよ！不幸すら見え
ていないという真実を。

——私は完璧に閉ざされた空間の中に立っていた。彼に初めて会ったのも自社の地下駐車場だった。その時彼は傷のない私の車の横腹をめぐり、そして私の人生のなかに入り込んだ。これまで私の車に傷をつけた人のように、そのまま逃げてしまってもよかったのに、彼は車の横で呆然と立っていた。「ハザードランプが点いていたので、すぐに来られるかと思っていました。」その時私も私は思った。「私には有難いことだが、このように生きていくこの人、長生き出来ないだろうなあ。」二年前の秋のことだった。その時も私はこのバーバリを着ていた。その時地下駐車場の暗いライトが星のように光り、私が着たこのバーバリの襟は6月の野草のように真つすぐだった。しかし今はこの場所で、くたびれた古バーバリを着た女が立って鼓膜が破れるほどに抑えられた沈黙を我慢しているだけだ。——

あの男は消えてしまったのだ。男は一体どこへ行ったのか。さっきカフェを出て、端正な男の紺色バーバリーの裾がふいに私の襟をかすめた時、私の腰に置いた彼の手の記憶が脳天を割るように鮮明に頭をよぎった。私が慌てて一歩後ずさりしたのは、男の親しみの表現が怖かったのではなく、その差しのべた手付きが私に馴染んでいたからであった。私の体はあの彼の手を記憶していたのか。彼はついに鳥のようにここまで飛んで来たのか。私は思わず「いや違う」と言った。しかし私はその言葉を本当に口の外に出したのか。いや、これまでのすべての出来事が実際に起きたというのか。私の耳には何の音も聞こえないで、ただ鼓膜を破るような重い沈黙だけであっ

た。すると正にその時、プリンのように凝り固まった沈黙を碎きながら、私の耳元に無数の鳥たちがばたばたと羽ばたいて飛び上がる音が聞こえた。私の引き出しの中に長く閉じ込められていた鳥たちは飛び上がって隊列を整え、ずっと前から夢見てきたことだと言わんばかりに一斉に一つの方向に向かって飛び始めた。私はその鳥たちが広々した大海を渡り、空だけから見ることができ、失われた都市を通り過ぎ、老いた峰のマチュピチュに頭をぶつけて死ぬ幻想を見たのだ。無数に死んでひっくり返る鳥の群れの肉体を。

鳥たちは死ぬ前に翼が生え始めた時のことを覚えているのか。初めて飛ぶ時、空を仰ぐ瞳が青い光で噴き上がっていたことを。そして時が過ぎて、翼が折れてぶるぶる震えるその瞬間が来たのだ。しかしその瞬間がある限り、死はすなわち生の過程として存在する、という彼の言葉通りに私は考えてもいいのか。生まれた鳥はどこかで死に、そしてまた幼い雛が生まれるだろう。この秋の曇り空のもと、遠く離れた草原の片隅に隠れていた昆虫たちががりがりに痩せて死んでいき、その横に洗ったゴマ粒のような卵がうず高く盛り上がっているように、遠く離れたペルーで一人の男が消え去ることもあるだろう。表彰された経歴があっても解雇されて三十四歳でいきなり旧世代になってしまい、千年を誓った都市を作って暮らしていた一人の人たちが跡形もなく消えてしまうことが起きたように。しかし一体どこに、一体どのように、どうして消えるということがあり得るのか。

私は彼と初めて見た演劇の題目を思い出した。<どんな人も消えない>という演劇であった。それを思い出すと、彼は自分が消えるために私にその演劇を一緒に見ようと言っていたのか。彼

がこのように消えてしまったことは「どんな人も最後まで消えない」という言葉を後日の私に残してほしかったのか？ 今は私が恋しがることはないのだから、どうか元気でいてくれと、地球の片隅、世界の主要都市の天気予報にも出てこないようなペルーでも何処でも、どうか生きていてくれと、私は今また祈ることも出来ないのだろうか？ 私は曇った秋の午後、一人立っていた。今携帯を持っている私の手は湿っていた。私は携帯をバッグの中に入れ、バーバリーの裾で濡れた手を拭いた。鳥たちが死んで仰向けになり、銀杏の記憶の中では恐竜が歩いていると言っても、とにかく私はペルーに行きたくないのだ。心の中で毎日ペルーに向かって隠密の飛翔を夢見ていた鳥たちはみんな去ってしまったのだから。そうであるが、また幼い雛たちが生まれたらどのようにするのか。引き出しの中に閉ざされて、遠いところだけを見るように運命づけられた目を大きく開いたままに。

早く家に帰らねばならないと思った。揺り椅子をベランダに出して置き、子供を膝に座らせたまま、ゆっくり子供の頭でも編んでやりながら、私はちよつと考えたかった。『この世で変わらななかった一つの真実は全てのもは変化するということだ』と、私が好きだった本の最初の一節に書いていたでしょう。私はその本のなかで、その一節だけが信じられなかったのです。この本が私に教えてくれた真実だけは変わらないものと信じたのです。この世でたった一つぐらいは変わらないで、いつもそこにいてくれるものが一つぐらいあればいいのです。それが愛であれ、人であれ、真実であれ、或いは私自身であれ：私は何かに寄りかかって立っていたかったし、存在は止まろうとするからです。」そうすれば老いた尾根、マチュピチュの急な坂、そんな場所に

永遠にそこに放っておかれる鳥たちの死骸のなかで耐えて翼をはばたいていた最後の一羽の鳥が動きを止めて、それまで生を誓って、果てしない大洋の上を飛んで、失われた都市を探しに出た彼の鋭い目に輝きを失い、涙が一粒落ち、「もう遅いのだ」と思っただけの歩も動くことのできない気分であったが、「ごめんね、本当に、ごめ、ん、ね。」私は少なくとも時間だけは私の前で長く続くものだと思っていた……ゆっくり、震える手を差し出し、私は彼の涙を拭いてやった。

黄色い銀杏の葉が落ちる道が続いていた。いま暗闇が広がる寂寞とした長い道だ。次の世に受け継いでまた明るい黄緑色の葉が萌え出すという無数の季節が繰り返されるが、墓の中のように寂寞として長い道だった。